



集英社インターナショナル NEWS

インターナショナル新書

死の医学

駒ヶ嶺朋子（脳神経内科医、詩人）

定価：968円（税込）

体裁：新書版／256ページ

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

ISBN 978-4-7976-8092-8



2月7日（月）発売

「魂と心の謎」に、いま医学のメスが入った！！

『怪談に学ぶ脳神経内科』*で、読書界を驚愕させた詩人にして脳神経内科医が今度は「臨死体験」「体外離脱」といった、かつては「語ることすらタブー」とされた現象に挑む。

そこで見えてきたのは、人生最後の瞬間を迎えたときに脳や神経細胞がどのようにその苦しみ、痛み、悲しみに立ち向かうかという、感動の物語だった！

* 中外医学社刊

脳医学が明らかにした「生と死のボーダーライン」の実相——それは我々の想像を超越する「驚異のメカニズム」だった！！

著者略歴

駒ヶ嶺 朋子（こまがみね ともこ）

1977年生。脳神経内科医として獨協医科大学病院（栃木県）で勤務。

医学博士。早稲田大学第一文学部哲学科社会学専修・獨協医科大学医学部医学科・同大学院医学研究科卒。2000年第38回現代詩手帖賞受賞（「駒ヶ嶺朋乎」名）。著書に『怪談に学ぶ脳神経内科』（中外医学社）、

詩集に『背丈ほどあるワレモコウ』『系統樹に灯る』（思潮社）がある。



本書の目次より

第一章 魂はさまよう——今や明らかになった「体外離脱」のメカニズム／国際語になっていた
「カナシバリ」／「病院の怪談」はなぜ多いのだろう

第二章 「暗いトンネル」を抜けて——科学の領域に入ってきた「臨死体験」／「新型コロナ否定論」を産み出す心のメカニズム／臨死体験をした人が得たものとは

第三章 譲り渡される命と心——揺れる「生死のボーダーライン」／混同されている尊厳死と安楽死／「死への衝動」もまた症状である

第四章 生と死が重なるとき——死者と再会する人たち／3・11と悲嘆幻覚／「中有」という仏教の知恵／現代医療に欠如している「魂」の概念

第五章 カゴの中の自由な心——視覚障害者が見る幻視／ゲーム依存症とADHDの関係／「依存」も生き抜く力に変えられる

第六章 擬死と芸術表現——自らを守るために起きる「記憶の切り離し」／「狐憑き」の正体は脳炎だった／不幸をも生きる力にする人間の脳

【本書のお問い合わせ・取材申込先】

集英社インターナショナル

電話 03-5211-2630 公式サイト <https://www.shueisha-int.co.jp/>